

コロナパニックへの対応と日本人の行動原理

丸山敏秋

覆水盆に返らず (It's no use crying over spilt milk.)

過ちては改むるに憚ることなかれ (『論語』学而篇)

はじめに

人類文明が大きく変動する時期には、予想できない事態が頻発する。二〇二〇年になってから世界中を大混乱に陥れたコロナウイルスパンデミックは、その典型的な事態の一つと言えるであろう。

二〇一九年十二月、中国湖北省の武漢市（人口約一千万人）で、新種のコロナウイルスに感染したと思われる発症者が多く出現した。このウイルスによる COVID-19 と後に命名された感染症は、またたくまに世界全域に伝染していった。「スペイン風邪」が流行した約百年前とは、比較にならないほど高度に文明化した世界では、グローバリゼーションの風にもあおられて、感染症はたちまち拡散していく。

このコロナ騒動に関して、筆者はこれまでに八本の論考を月刊誌『倫理』（倫理研究所発行）に掲載し、倫理研

研究所の会員組織に宛てたいくつものメッセージを発してきた。現時点ではいまだに終息（収束）は宣言されていないが、すでに発生から二年以上が過ぎていくことから、先の論考等を踏まえながら（一部分は引きながら）、このパニックで露わになった日本人に特徴的な心性（意識）と行動様式を中心に、総括的な考察を行ってみたい。

新規感染症への対応できわめて重要なのは、初動である。COVID-19では発生初期に日本でどのような対応がなされたのか、約三カ月間をまず振り返ってみる。その際に、二〇〇九年に発生した新型インフルエンザのパニックとの比較が意味をもつ。

筆者はコロナパンデミックを「インフォデミック」と捉える見方に賛同している。高度な情報化社会の中で、情報の過不足や真偽不明な情報が感染症をいたずらに拡大させてしまった。とくに日本ではテレビを中心とした報道の影響が大きく、国民の多くが恐怖心を植え付けられてしまった。その恐怖心が充満した非常時ゆえに、感染対策の政治決断に狂いが生じた事実も無視できない。どんなことが起きていたのか。

感染症を中心とした医学界の対応にも疑問視すべき出来事が少なくなかった。専門家の間で見解に相違が出るのはやむを得ないとしても、その発信の仕方において言論統制のような対処が一部でなされたことは看過できない。報道や言論の世界における「自由」の問題が問われることになった。

そのような事柄について考察した上で、非常時に露見した現代の日本人の意識や行動様式の特徴について考えてみたい。